

(5) 保育の意義が一層明確にされた。

④ 今後の問題

(1) 新しい保育技術の分野として、行動観察、諸資料の利用、調査の方法などを、養成課程でも現場でももつと重視する必要がある。

(2) 社会性を欠く消極的な子どもに対する準備保育(新入園児中、社会性を欠く、あるいは消極的な幼児、その他についてのウォーミング・アップ的保育をさす)が極めて有効であり、これにより入園期の心理的緊張感を緩和し得ることが認められるが、その回数方法、時期などについては、一層研究の必要がある。

(3) カウンセリングの効果、特に日常保育における行動の変化を正しく評価するためにはどのようにすべきか。

(4) グループ・カウンセリングの観察結果から、教師間に学級のもつ意義、グループ効果が認識されてきた。しかし学級編成における成員の性別の割合、組の人数などについてでは今後の研究の必要があろう。

幼児の神仏観念について

——幼児心理に芽生えた神仏観念の調査——

東京・神田寺幼稚園

友松 あきみち
山本 千枝子
小野 口弘子

幼児期の神仏観念の発達が現代人の宗教感覚を基として、どのように発達してゆくかの調査は未だ少なく、宗教立幼稚園の立場から、宗教教育をおこなう上において、重要な意義をもつものである。私達は、その問題についての調査と、分析を質問法によって、東京都内十九園、三〇四名の幼児を対象としておこなった。

質問項目は自然現象について三項目、神観、仏観についてそれぞれ十八項目、秩尊觀について三項目を設定し、幼児の答えを出来るだけ詳細に記録した。

この世の中は誰が作ったかについての解答によれば、神が作ったと答えた者が五六%を示しその他、仏、人間、天使、秩尊が一、六%から二、一%程度で、わからないと答えた者が比較的多く二六、七%を示している。

神と答えた者を幼稚園別にあげてみると、当園の四二%、仏教立六七%、キリスト教立八一%、神社立四七%、個人立五〇%となつている。

これによつてみると、キリスト教立の場合だけでなく五才児においては一般に、神の観念が少しずつ芽生えてきており、この世の中を神が創造したという考え方、神の全能と結びついていることが認められる。

年令別に神の観念の芽生えについて、当園の三、四、五才児を対象として比較してみると、三才児では三十七名中六名が神と答え、他はお母さん、先生、みんななどという答が続いている。これは三才児の場合、畏敬を最も身近かな人々に感ずるからであつて、神そのものの理解は未だ遠いものであろう。四才児においては、八十名中三十三名が神と答え、三才児に比べるかに多くなっている。次に、幼児の直率的な愛取り方がどのようにまとまっているかをば

により解釈しようと試みた。幼児に対し、自由に神あるいは仏の絵を描くことを求め、更に自分をも描き入れてもらつたが、その表現法は多種多様で、おおよそ次のように分類してみた。

神観においては、雲上にある神様を表現した者が二八、三%で最高位を示し、普通人と同じ表現をとった者が一五、五%で、偶像や偶話の神を描いた者が一二、八%、神棚を描いた者が一、一%となつてゐる。

仏観の絵について分類した場合は、仏壇を描いた者が圧倒的に多く四〇、五%という高率を示し、統いて偶像が二〇、八%、普通人の表現をとった者が一〇、六%となっており、雲上の仏は三、九%にすぎない。

「神様は誰がなるか」に対する解答は各開共に偉人と答えている者が多く三五%を示し、死人と答えた者が二八%だった。その他の解答群では、イエス及び天使というのが、キリスト教立の場合に限られている。

また「仏様は誰がなるか」に対する解答では、死人というのが最高位で三九%で、偉人は僅か一、八%、その他は石とか、おじいさん、おばあさんといった解答だった。

「神様と仏様とが同一品格であるか」の問に対しても、違うという答は五才児一八七名中一三八名で、これは仏観においても同様の傾向を来たしている。

以上の調査によつてみると、神仏に対する幼児の觀念は、自然発生的に宗教感情が芽生えるということは、あまりなく、主として身近かなものへの敬慕と信頼につながっていることがわかる。次いで生活環境や家庭教育が第二義的役割を果してゐることがわかる。

幼年期における道徳性の形成

広島大学

田代高英

道徳は人間が社会の一員として生きていく上に欠くことのできないものである。しかし、この道徳性の形成を人間の成長発達の段階で考えると、最近の教育学者、心理学者、社会学者のいずれを問わず、幼年期において基本的な方向が決定される、という点で見解を同じくしている。

たとえば、フリードランダーによれば、二才の子どもと八才の子どものもつとも重要な相違点は、良心や道徳性の問題であるといわれる。二才の子どもは自分の行動を單に快、不快でしか判断することができないが、八才の子どもになるとたとえ行動はともなわなくとも、すでに何が正しく、何が間違っているかを知っている。

このような点から、われわれは良心や道徳性の基本的な形成期を二才より八才の間と考えることができよう。

この間における幼児の発達を考えると、まず道徳性の形成の最初の芽生えは、模倣というかたちで現われる。幼児は早くからおとなとの言動をまね、それによっておとなとの社会を支配している社会的規範を理解するようになる。

次には両親の要求や願いにたいする同一化ということが考えられ